

## ロシアにおける反ユダヤポグロム史のための資料集 (6)

黒川 知文

社会科教育講座

### The Materials for the History of Anti-Jewish Pogroms in Russia (6)

Tomobumi KUROKAWA

*Department of Social Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

第124号

ミンスク鉄道憲兵局長。1881年5月7日。第595号。ミンスク市。ユダヤ人迫害について。国家警察局宛。リバヴォ・ロメンスカヤ線ゴメリ・ロメン駅間の南部全体が、ユダヤ人迫害が起こるといふ噂でざわめき立っている。いくつかの駅において、次のような内容の手書きのアピール文が貼られていた。「我々はコノトプ・ゴメリ間に現れる。月曜日(5月4日)はニスコフカとスノフ、水曜日(5月6日)はシニャフカとアレクサンドロフカ(近郊の村々)。我々は、忌まわしいユダヤ人を襲撃し、ユダヤ民族を撲滅する。キリスト教徒はふるって参加されたし。」この文書には、「多くの者の1人」という署名があった。これらのアピール文の筆跡は不自然に歪んでおり、文法はわざと間違えていた。これらのアピール文の一部を添付する。これに驚いたユダヤ人は、ハリコフ及びヴィレンの軍管区長に、軍隊を派遣するよう要請した。その結果、ゴロドニャとゴメリに歩兵大隊が派遣され、ロムニにはコサック龍騎兵が残った。5月2日から3日まで夜間、ロムニにおいて、様々なキリスト教徒プロレタリアートからなる千人の群衆が広場に集まった。龍騎兵隊によって解散させられたが、ユダヤ人の居酒屋を一軒破壊することに成功した。村からやってきた農民たちは、ユダヤ人に対して「おまえたちを皆殺しにしてやる」と脅し、次のように言った。「おまえたちを皆殺しにしたら、今度は地主だ。奴等は、農民を犠牲にして、廣大無辺の土地を不法に所有している。ユダ公と地主をやっつけろと呼びかけているのは、黄金の文字で記された皇帝の勅令だ」と。このような噂は、農民の間にあまねく広がっている。彼らはいくつかの駅に行き、「ユダ公と地主をやっつけることを命じた皇帝の黄金の勅令」を見せてくれと述べている。鉄道修理工場や荷役人のグループに雇われた数千の労働者をはじめとする、主要な、そして、きわめて大勢の騒乱者を運ぶことができたのは、鉄道であり、私は、自分自身で直接行った

けではなく、局長や憲兵隊長を通して、すべての労働者に分別ある行動をするように説得し、次のように警告した。すなわち「方々に現れ始めたユダヤ人迫害は皇帝陛下によって禁止された。陛下の命令に対する反逆は暴動や反乱と同じ罪であり、参加者はもっとも厳しい刑罰を受ける。ユダヤ人に対する現在の襲撃を教唆する者は、皇帝の敵、全国民の恩人である皇帝を殺した者以外ではない。また、彼らは現在、人民そのものをも滅ぼそうとしており、人民の血に飢え渴きながら、政府や皇帝の御意思と戦うよう教唆しているのである。最後に、皇帝と祖国を愛するロシアのすべての息子たちは、教唆を行う敵を捕らえ、当局に引き渡すことを誓わねばならない。」このような説得は、ミンスク、ゴメリ、スノフ、ロムニの修理工場において行われ、労働者を正気に返す効果があった。信心深そうに十字を切りながら、彼らは私と私の部下たちに対して、本当のことを教えてくれてありがとう、と言った。そして、騒乱にはけっして参加しないだけでなく、教唆する者がいれば全員憲兵に差し出すことを厳かに約束した。今後、私はどのようなデモがあっても、鉄道労働者たちを完全におとなしくさせておけると断言する。他方、自分の財産を根絶から救い出したユダヤ人は、鉄道駅そのものを略奪の危険に晒している。自分の持ち物を梱包し、駅にそれらを持ってきて、発送すべき商品として置き、高い値をつけて置いておいた。しかし、けっして発送はせず、予約表をつけて隠しておいた。このように、この物品は駅に留め置かれどこにも移されることはなかった。アジテーターはこの物品の数量を正確に把握していた。ユダヤ人は自分たちを襲った荒廃すらも利益に変えてしまう。略奪された物品の価値をはるかに越える大金を鉄道から得ているからだ。しかし、私は、鉄道首脳部と話し合いをし、もっとも妥当だと思える手段を講じて、この憎悪に終止符を打ちたいと考えている。連隊長フォン・ロトキルフ(Ll. d. 124-126)。

## 第125号

内務省。エカチェリノスラフスキー県知事。官房扱い。第3課。1881年5月7日付。第1974号。エカチェリノスラフ。

内務大臣殿へ。

本年5月1日午後10時、アレクサンドロフスキー郡警察署長から、同日午後5時に当地で発生した騒乱に関する電報を受け取った。鉄道機関庫の職人を主体とする群衆がユダヤ人商店を襲撃した。アレクサンドロフスク市にはきわめて少人数の警察と小規模の郡駐留部隊しかなかったため、すぐさま私は34歩兵師団長にかけあって、エカチェリノスラフに駐留している連隊から2個中隊をエカチェリノスラフに派遣してくれるよう求め、その夜自らアレクサンドロフスクに派遣小隊とともに出発した。5月2日午前9時にアレクサンドロフスクに到着した。前日に始まった騒乱は夜1時まで続いた。10軒以上の民家と8軒の商店、数軒の居酒屋、酒蔵2棟、約80個の大型木箱が、滅茶苦茶に破壊されていた。これらはすべて、ユダヤ人の所有であった。家財や商品は略奪された。騒乱の首謀者及びリーダーは、ロゾヴォ・セヴァストポリスク鉄道のアレクサンドロフスク機関庫の職人たちであり、職人の数は約800人である。彼らの他に、アレクサンドロフスク市の町人やヴォズネセンカの近郊農村の農民の中から幾人かが加わっていた。警察は、騒乱のはじめの頃は説得によって、後では地元の軍隊の力によって、騒乱を鎮圧しようとした。しかし、いかなる措置も効果がなく、銃を構えても混乱を抑えることができなかった。約50人を騒乱の現場で逮捕し、暴徒の中から引き離れたが、それでも騒乱は収まらなかった。私がアレクサンドロフスクに来たときにはすでに平静に戻っていたが、群衆のユダヤ人に対する憎悪は強く、騒乱の再発を防ぐには、エカチェリノスラフからアレクサンドロフスクへさらに2個中隊を派遣する必要があると考えた。今後、ヴォズネセンカ村の農民や、ドニエプル川の対岸にある近くの工場から労働者が押し寄せること（私は、彼らがドニエプル川を渡って町に入ることを禁止したが）が予測されるので、なおさらこの措置が必要であると考えたのである。5月2日夜アレクサンドロフスク鉄道駅の職人の集団が、騒乱を起こそうとして、派遣された小隊も押し除けながら、町に再度入り始めた。しかし、銃を構えると、群衆は方々に散り、怯えながら立ち去った。その中の6人が若干の傷を負い、1人が病院に運ばれた。5月3日丸一日の間、アレクサンドロフスクでは秩序が保たれたが、群衆の興奮は収まらず、現地に派遣された4個中隊をアレクサンドロフスクに残しておく必要があると考えた。検

察官の指導のもと、裁判所は、騒乱について調査を開始した。アレクサンドロフスクにおいて起こった騒乱と同じ時期に、アレクサンドロフスクの郊外の7つの村（ヴォズネセンスク、ペトロフスキー、ソフィエフカ、ナタリエフカ、カムイシェヴィイ、アンドレエフカ、グリゴリエフカ）において、ユダヤ人の家（主に居酒屋）が農民によって破壊された。上記の場所の他に、最近、小規模ながら、ユダヤ人の家屋への襲撃と破壊が、ロゾヴォイ・セヴァストポリスカヤ鉄道の駅において（この件については、私は本年5月3日の電報にて閣下にお伝えした）、また、ノヴォモスコフスキー郡のエリサヴェトフカ村及びマヌイロフカ村においても起こった。ニコポリ村において、夜、ユダヤ人の3軒の民家の窓が外された。ユダヤ人に対する新たな襲撃の噂が拡がりつつある。私の県内様々な地域においてこの噂は根強い。ユダヤ人を襲撃しても罰を受けなくてもよいかもしれないとの間違った情報もこの噂の拡がりを助長しているため、私は、偽りの情報を根絶し、人々が騒乱に走らぬようにするために、住民に対して特別公告を出す必要があると考えた。それとは関わりなく、私は、特別公告を出し、軍隊の力を借りて騒乱を鎮圧するということを人々に知らせた。現在まで発生した騒乱だけではなく、もっぱらユダヤ人に対して向けられる新しい襲撃についての噂も必ず報告する。ユダヤ人に対する敵意は、群衆の間で頂点に達しており、ロシア人住民（特に商工業階級の人々）も、怯えている。というのも、この地区においては、ロシア人とユダヤ人は商売上の密接な繋がりがあるので、ユダヤ人の資産破壊とそれに伴う彼らの零落は、ロシア人の取引先の利益をも大きく損なう恐れがあるからである。（Ll. d. 128-131）。

## 第126号

内務大臣から皇帝陛下への報告。国家警察局扱い。

キエフスキー、ヴォルィンスキー、ポドリスキー総督から次々と届いてくる報告から判断すると、彼の任地において秩序は完全に回復しました。また、騒乱の際に逮捕された人々の、騒乱への参加の程度がどれくらいであったかを明らかにするため調査が行われています。侍従武官長ドレンチェレンが私に宛てて書いた私信において彼が明らかにした意見によると、騒乱には政治的な背景はありません。手紙では「彼らは用意ができていなかった」と書かれていた。「これは、実際に現地のロシア人を苦しめているユダヤ人に対する怒りがつもりにつもった結果である。政府の敵も騒乱に参加したとしても、彼らは、自分たちにとって相応しいこととして、ただ騒動にくっついていただけであろう。繰り返すが、彼らが騒乱を指揮していたというわ

けではないように思われるのである。万事考慮すると自分でも信じられないくらいに、起こったことはみな奇妙で特異な出来事であり、蛮行や醜態と同時に、何か奴隷のような恭順と不可解な善意も見受けられた。例えば、郡で逮捕された人々は、50人1組で、農民から選ばれた3、4人の村長（むらおさ）からなる護送隊の監視のもとでキエフに送られた。群衆は、だれかリーダー的な人が登場すると、帽子を取って、ユダヤ人に対する不満を述べた。しかし、この人物が立ち去ると、群衆は再びおぞましい行為を始めるのであった。民衆の多くは、自分たちは国家にとって望ましいことを行っていると本気で信じていたし、当局からユダヤ人を襲撃せよとの命令が出ていると心から思っていた。この命令が出されたのは、ユダヤ人がボズにおいて皇帝を殺したためである、という噂も流れていた。」その上、正式な意見では、キエフ総督は、騒乱において軍隊や警察による逮捕者がかなりな数に上るために取られた措置について、報告している。これらの措置は、次のとおりである。1879年4月5日の皇帝の勅令に基づいて、総督は、騒乱のすべての予審を最高裁検事に任せたらよいのではないかと提案した。さらに、首謀者や教唆者、略奪犯行現場で逮捕された人々、逮捕時に当局に抵抗した人々を軍法会議にかけるとする予定である。通りで群衆に混じって行った暴力行為で逮捕されたり、まき散らされた家財道具を捨てて逮捕されたすべての人々は、行政の捜査にかけるとできると判断された。地元の住民ではないと思われる人々の中のある人々は故郷に送られた。一定の住所と家族、定職を持つ人々は、信頼できる人の助けを借りて保釈された。上記について陛下に報告いたします。また、騒乱時に逮捕された人々について、侍従武官長ドレンチェレンが取った処置は、適切であると考えている。私は、騒乱が起きたすべての土地において、当局が逮捕された人々に対してできるだけ均一の措置を講じられるよう取り計らった。しかし、南部において発生した騒乱に政治的な背景がなかったというキエフ総督の考えに同意できない。また、民衆の中に悪意のある人々（キエフの地下印刷所の摘発の際に逮捕された）の影響を拡大する目的で公示されたアピール文では、1騒乱においては、これらの悪意のある人々が属しているグループが指導的な役割を果たすべきではっきり指示されているのである。侍従武官長イグナチエフ公。1881年5月「14」日。(Ll. d. 136-138)

〈注〉1：このアピール文は、オリジナルでもコピーでも見付からなかった。編集部。

#### 第127号

1881年5月15日侍従武官長ドレンチェレンからの電報の写し。

チェルカッスキー、カニェフスキー、チギリンスキー、ズヴェニゴロツキー郡の治安をある人物に任せる必要があると考えているので、この任務を、集結部隊を指揮しているネヴァドフスキー少将に与えることができるよう許可を取り付けてください。治安が保たれるようになるまですべての関連事項について、警察を彼の指揮下に置きました。また、軍の状態については公表しておりません。というのも、ロシア国内に対してだけでなく、諸外国に対しても、悪印象を与えることになる恐れがあるからです。(L. d. 139)。

#### 第128号

本年5月15日侍従武官長ドレンチェレンへの電報写し。

電報に記されていた地域において軍がどのような状態にあるかについて閣下は公表を望まれませんでしたが。1879年4月5日付の陛下の命令に基づいて、閣下は、地元の警察職員に関するある程度の権威をこの将軍に与えるかどうかについて決定権を持っておられますので、私は、ネヴァドフスキー将軍の当該地域統治者任命について、皇帝陛下にあえて報告し、陛下の御心を患わそうとは思っておりません。(L. d. 140)。

#### 第129号

オデッサ。総督ドンドゥーコフ・コルサコフ公へ。

侍従武官長ドレンチェレンから「ユダヤ人襲撃において逮捕された者たちに対して、1879年4月5日の皇帝の勅令を適用し、略奪と抵抗の罪を犯した者だけを裁判にかけ、他は行政処分をするつもりである」という報告があった。皇帝が認めた上記の提案に関して報告しながら、私はさらに次のことを申し添える必要があると考えた。すなわち「政府の視点から見ると、できるだけ早く騒乱に関する処理を終わらせることができ極めて重要であり、裁判にかけると、社会の動揺はますます激しくなるだけだ」と。逮捕者の中でも、無教養な社会階級に属する人々に対しては寛大な態度が望ましく、知識人や教唆者に対してはできるだけ厳しい処置が望ましい。1 (L. d. 141)。

#### 第130号

内務省。スモレンスク県知事より。官房第2課。1881年5月8日。第246P号。内務大臣殿へ。

最近、スモレンスク市において、キリスト教徒とユダヤ人住民との間に衝突が起こるとの噂が広まり、定着しつつある。また、労働者がユダヤ人を脅かしている

という事実をある人々または組合が明らかにした。これらのことを鑑み、

〈注〉1：同じ内容の電報がハリコフ総督スヴァトポリク・ミルスキーのもとに送られた。編集者。

私は、いかなる種類の騒乱をも未然に防ぐために、特に、5月21日のキリスト昇天祭にいろんな場所からスモレンスク市に約3万人もの大勢の人が集まる時には、スモレンスク市の住民に私からメッセージを発する必要があると考えた。これとは関係なく、県の軍首脳部との協議に基づいて、夜のパトロールの回数が2倍になった。また、警察を助け、屋外歩哨任務を遂行するために、1人の将校の指揮のもと88人の警察官が派遣された。さらに、必要な場合行われる部隊の召集の手順と、その配分について取り決めが行われた。以上閣下に報告すると共に、「この方法を取るならば、騒乱が起こらず、そうでない場合でも、騒乱はすぐに鎮圧できる」ということを付け加えさせていただきます。知事 L・トマラ。(L. d. 145)。

#### 第131号

内務省。タヴリーチェスキー県知事。官房扱い。第107号。1881年5月8日付。シンフェロポリ。内務大臣殿へ。

本年4月はじめに、ベルジャンスコエ村は、オデッサ総督と私に対して「過越の祭日にベルジャンスクにおいてユダヤ人への襲撃の恐れがある」と述べた。そのため、総督は、ロストフから1個中隊を派遣し、私は、私の官房の主任であるゴンチャロフを派遣した。ゴンチャロフは、ベルジャンスク市に着くとすぐに、私に「ベルジャンスクは万事平穏で、ユダヤ人に対する賤民の愚かな襲撃の可能性を示すものは何もない」と報告してきた。もし敵意があるとすれば、それはギリシャ人とユダヤ人との間においてである。というのも、ギリシャ人だけではなく、ユダヤ人も小さな商売をして互いに競争関係にあり、いくらか大きな喧嘩することが時々あるからである。現在、去年の不作により、ベルジャンスクには、深刻な騒乱を引き起こす恐れがある肉体労働者の集団がない。いつもユダヤ人はビクビクしながら行動していた。彼らはみな、ちょっとしたことに驚き、誰彼となく「ユダヤ人襲撃について何か情報はないか。それはいつ起こるのか。」と尋ねていた。一般の人々は、ときどきあざ笑いながら彼らについて不適切な冗談を言うことがあった。しかし、これはすべて幾分おどけた調子で語られるものであった。全般的に、ベルジャンスクにおいて平和が破られることはなかった。その後、本年4月23日から5月7日まで、次の報告が私のもとに届いた。1) ドニエプロフ

スキー郡警察署長より：5月9日のカホフスカヤの縁日でユダヤ人への襲撃があるという噂が人々の間に流れており、この騒乱の予防のために、オデッサ氏の総督は、警察を援護するためにコサックの騎兵中隊を派遣し、私は、県庁の責任者リハノフを派遣したが、予定された破局の時はまだ始まらなかった。2) メリトポリスキーの郡警察署長より：ロシア人たちがメリトポリ市へ殺到しユダヤ人を襲撃しようとしている。そのため、5月3日に、シンフェロポリから、リトフスキー歩兵連隊から2個中隊と、私の部下で特殊任務を帯びたシモニチ伯爵が送られたが、結果はまだ不明。3) アレシユコフスキー市長からの5月4日付の電報：アレシユコフスキーのユダヤ人に関して類似した噂が流れている。このため、私は、ヘルソンスキー県の軍首脳部に協力を依頼したところ、彼らによりアレシユキに歩兵小隊1個が派遣された。4) ゲニチェスク村とポリョイ・トクマク村のユダヤ人たちが、5月3、4日に、自分たちに危険が迫っていることを私にも伝えてきたので、私は、管轄地域の警察当局に対して、平穏と平和を維持すべく細心の注意を払うよう指示した。5) エカチュリノスラフ県アレクサンドロフスク郡の境目にある、郡の中心ではない町オレホフにおいて、5月4日夜12時からユダヤ人に対する襲撃が始まった。この鎮圧のために、メリトポリに派遣された2個中隊の中から1個が派遣された。ベルジャンスキー郡とアレクサンドロフスキー郡との境界線上の全域において騒乱が発生したため、本日、自分で現地に赴く予定。結果についてはすぐに報告する。私は、5月6日に、農民役場の常任メンバーや郷当局と町人役場に回状で、騒乱の法的責任がどこにあるかを問い合わせ、同じく、タヴリーチェスキーの大主教に、このことについてすべてを教区の住民に対して司祭を通じて説明するように求めた。県知事カベリン。(L. d. 151-153)。

#### 第132号

内務大臣へ。第2739号に対する1881年5月16日付キエフ発電報。

閣下の電報に従い、私は、私に提供されている権利を利用し、私が述べた計画を実行に移します。ドレンチェレン。(L. d. 156)。

#### 第133号

ペテルブルグ市電報局。憲兵団施設。1881年5月16日発信電報第 号。暗号を使用。キエフの総督へ。

ユダヤ人騒乱に伴って発生した事態の動向に関して閣下がお立てになった計画は陛下から承認されました。

また、政府の視点から見ると、できるだけ早い時期に、社会における動揺を助長するしかないこのような事態を收拾することがきわめて肝要であると付言します。同様に、無教養な階級に属する逮捕者たちに対しては寛大な処置を講じることが望ましく、知識人たちや教唆者たちには厳しい処置が可能です。侍従武官長イグナチエフ公。1881年5月16日発送。(L. d. 157)。

## 第134号

ハリコフの侍従武官長ミルスキー公からの暗号電報。1881年5月17日付。

5月16日付の電報において、閣下は騒乱に関して私に託された仕事について、4月5日の法律を適用すべきだと述べておられますが、私は、このご意見にまったく同意いたします。私はすでに処置を講じました。現在、私は、最高裁の検事に対して、審議を早く進めるよう要請しております。(L. d. 158)。

## 第135号

内務大臣閣下へ。

本報告に添付したリバフの反ユダヤ主義新聞第107号1 を読まれるならば、閣下は、この新聞の編集者によって、ますます多くの民衆がユダヤ人に対して憤りを強めていることを確信なさるでしょう。リバフのユダヤ人は、閣下が我々のところに広がっている危険な噂を考慮しつつ、至急この敵意を鎮めるために措置を講じてくれることを涙ながらに懇願しております。この敵意が続けば、結局、さらに大規模な対策を講ずる必要が出てくる恐れがあります。この状況は、一分一秒の遅れも許しません。リバフのユダヤ人の叫び。リバフ市。1881年5月11日。(L. d. 160)。

## 第136号

内務省。オデッサ臨時総督。1881年5月9日。第132号。オデッサ。内務大臣殿。

オデッサ市において5月3日にロシア人とユダヤ人住民との間で発生した衝突に関する私の電報の補足として、本日市長からだけではなく軍区長たち(来るべき騒乱に備えて、市はいくつかの軍区に分割されている)からも届いた報告に基づき、発生した出来事についてさらに詳しく報告いたします。オデッサにおいて騒乱が起こるかもしれないという噂が復活祭の祝日まで広がっていた。私は、この噂を考慮し、オデッサに配置された軍隊に関する4月6日付の命令によって、

市を8つの軍区に分割するよう命じた。それらすべてを軍務官の中から選ばれた特別指揮官にそれぞれ委ねた。さらに、行動に統一性を与えるために、4軍区を一つとして2つのグループに分け、一つをオデッサ軍管区長クルジヴォプロツキー少将に、もう一つを、皇帝陛下の侍従武官団に属し、私の部下でもあるアルツェゴフェン少将に委ねた。4月7日に、私は、オデッサ市の住民に対して声明を出し、悪意のある人々が流した騒乱の噂を信じないように求めた。また、秩序攪乱を企てた主犯は軍隊に引き渡されることになるかと警告した。同時に、オデッサの市長は、秩序と平静の維持のために、警戒用特別規則を一般告示した。あらかじめ立てられていたスケジュールに基づいて、各軍区に配備されていたすべての部隊は、一般警報の後に、指示された場所に移動しなければならなかった。キリスト受難週の最後の数日間及び祝日の最初の3日間に、すべての軍区において強化パトロールが実施された。その他の期間は、すべての軍区において、小規模のパトロールが実施された。4月29日の夜から30日にかけて4人のユダヤ人と2人のロシア人の間に起こった衝突1件を除けば、5月3日の日曜日まで、秩序の攪乱はなかった。この衝突事件で、町人ペトゥホフとドミトリエフが、鋭利な武器によって軽傷を負った。私は、この結果発生した事件を裁判所に委ねず、行政命令により解決した。これにより、ユダヤ人犯人であるアロン、クルリ、ゴフシェイ・プロスクロフスキーは、故郷に送還され、2年間オデッサに入ることを禁止された。周知のように、5月3日午後5時頃騒乱の発生の原因となったのは、蚤の市が開かれていたプロホロフスカヤ広場において隣り同士になったユダヤ人とロシア人商人の間で起こった言い争いであった。言い争いはすぐに殴り合いに変わった。双方にそれぞれ、同じ信仰の人々が味方し殴り合いに加わった。この日は復活日だったので、警察によって集合場所または取引所として利用することを許可されて広場に集まっていたかなりの数の肉体労働者は興奮状態にあった。このことが、騒乱のきわめて急速な拡大を助長したのである。騒乱は、プロホロフスカヤ広場に隣接するユダヤ人の商店や民家の窓ガラスの破壊と、それほど多くはなかったが、家財道具の破壊に発展した。この場所において殴り合いの喧嘩はそれほど多くなかった。殴られた人は、2人のユダヤ人と2人のロシア人だけであった。騒乱が始まるとすぐに、2本の赤い旗がすべての火の見やぐらにかかげられ、一般の人々に対して警報が発せられた。6時頃に部隊が、それぞれの指定地点に配置された。15の射撃大隊の2個中隊がプロホロフスカヤ広場に到着すると、2千人ほどの荒れ狂う群衆は、プロホロフスカヤ広場に隣接する通りを疾走した。一部は、チラスポリスカヤ、ポリショイ・アルナウツカヤ、バザルナヤ通り及び隣接の路地に向かい、さらに、メシャン

スカヤ、ウスペンスカヤ通りを通過してプレオブラジェンスカヤ通りに逃げ込んだ。また一部は、チラスポリスカヤ通りからクリヴァヤ、デグチャルナヤ、クズネチュナヤ、スピリドフスカヤ、グレヴァヤ、コブレフスカヤ通りを通過してトルゴヴァヤ通りまで逃げた。その後、個別の小さなグループがリシェリエフスカヤ通りや、トロイツカヤ、エカテリノスラフスカヤ、ポチュトヴァヤ、エヴレイスカヤ通り、さらに、数は非常に少ないがデリバソフスカヤ通りなどにも現れ出した。部隊の一部がすばやく集合し、コサックたちが短鞭を使って暴徒たちを追い散らしてくれたおかげで、すべての街路での騒動は小規模の衝突に分断された。様々な場所において、ユダヤ人や一部キリスト教徒の民家や居酒屋、女郎屋のガラスが割られたが、家財に対する大きな損害は発生しなかった。秩序の回復のために、できるだけ多くの場所に軍隊を投入する必要が出てきた。これは、街路のすべての地点に間断ないパトロールを実行したり、時折前線を拡大して群衆がさらに拡大しないようにしたり、何もせずぶらぶらしている人を排除し、不審者を逮捕したり、あらゆる種類の集合を禁止し、各家庭において最も厳しい秩序を回復するよう世帯主を説得したり、すべての労働組合に対する個人的責任をその経営者に求めることによって達成された。オデッサ市長は、秩序が回復するまでの間すべての居酒屋やバーを閉店するようにただちに処置を講じた。夜9時頃、かなり大きな群衆が再び蚤の市に現れた。商店や大箱に残された商品を奪いかすめるためであった。しかし、そこに配置されていた軍隊の活動によって、これらの不法行為はすぐに鎮圧された。100人程の人が逮捕されたが、他は四散した。夕方10時頃に、秩序は全域において回復した。しかし、部隊は夜中いっぱい持ち場に残り、強化パトロールは全地域において実施された。この際に、幾分疑わしい人物が逮捕された。各家の屋敷番には、夜間にだれも家の外に出さぬよう、また、四六時中門のところにいて家の人以外は誰も中に入れないように命じた。5月3日の夜から4日までまったく平静であったが、翌日は一日中興奮状態が続いた。すべての商店は、ごく少数の例外を除いて、一日中閉じられたままだった。通りでは、大きな動きが見られた。5月4日の朝に、オデッサ市長は、私の指示により、オデッサの市民に声明を出し、暴徒たちに対して武器が使用された際に危害を被ることのないため、騒乱が発生したら家から出ないよう要請した。騒乱が発生した通りでは、乗用馬車による移動は禁止され、群衆はすべて武器によって解散させられると警告した。いかなる理由があっても人の集まりを禁止するために処置が朝から講じられ、部隊が一日中方々に配置され、そこからパトロール隊が巡回に出かけ、町の様々な場所において一つの衝突も起きないように警戒に当たった。これにもかかわらず、正

午頃、さらに大きな騒乱がミハイロフスキー地区とペトロパヴロフスキー地区に発生した。しかし、オデッサ士官学校生と警察職員の精力的な活動のおかげで、これらの騒乱はごく初期に鎮圧された。スターラヤ・レズニチュナヤ通りにおいて、斧や杭や棍棒で武装した100人以上のユダヤ人の群衆が、通りで行われていたキリスト教徒との喧嘩に加わろうとしたところ、すぐに、ほぼ全員が士官学校の生徒たちに取り囲まれ、武装解除され、アレクサンドロフスキー警察署の建物に送られた。その時、武装したユダヤ人学生のうち6人が(1人はリボルバーと6発の弾丸、15の実弾で、もう1人は鉄球付短棒で武装していた)1人のロシア人を襲って殴り始めたが、すぐに取り押さえられ地区警察署に連行された。上記のユダヤ人学生のうち何人かは、以前政治犯として取り調べを受けており、警察の監視対象となっていた人物であることが判明した。彼らの内の1人がモルドゥカイ・グレチであった。彼の兄弟は、彼と会わせてくれと願い出てきたが、モルドゥカイは取り調べを受けた。その際に、政治宣伝ビラと革命に関する印刷物のコピーの所持が見つかった。その他、ロゼンブリトという学生は、雑誌『黒い再分割』の創刊者として諜報機関から指摘されていた人物である。最後に、ハフキンという名の学生は、諜報機関からの情報によれば、『黒い再分割』の一員である。警察署の一室における取り調べの中で『人民の意思』の最新号が見つかった。これらの人物の素性と、彼らの参加の目的がどこにあったのか取り調べが行われている。警察には逮捕者がたくさん収容されており、衛兵の数を削減するために、私は、停泊地に泊めてある3つの艇に逮捕者を移動する措置を講じた。昼の3時頃、私は、全市を個人的に見て回り、発生した騒乱は深刻な性質を持つものではなく、主に、ユダヤ人の民家や居酒屋の窓ガラスが割られたことくらいで、大きな被害がなかったことが判明した。5月4日夕方頃、市の全域にわたって平静が回復した。私は、軍隊の疲労を考慮し、部隊の半分に休暇を与えるべく兵舎に帰すことが可能であると判断した。オデッサ市長は、労働者階級に温かい食事を取らせるために、飲み屋の開店を許可する措置を講じ、「閉店の恐れがある場合は、温かい飲み物を販売しない」という誓約を店主から取り付けた。4日夜から5日にかけて平穏のうちに時が過ぎた。5月5日は、市内において平和は乱されなかった。騒乱が起こったのは、郊外のチュムナヤ・ゴルカとユダヤ人墓地の側だけであった。ここで、労働者の群れは、ユダヤ人の民家に対して乱暴狼藉を働き始めた。12人のコサックと士官学校生からなる2個小隊が群衆を追い散らした。群衆は郊外の庭園や別荘に散ったが、士官学校生徒の協力のもとでコサック兵は、19人を逮捕することに成功した。彼らは主に浮浪者であった。騒乱の個々のケースが郊外の別荘において起こったため、

5月5日、士官学校生徒の2個小隊とコサック兵はチュムナヤ・ゴルカに丸一日留まり、その場所から様々な地区にパトロール隊を派遣し、さらに39人を逮捕した。夜までに秩序は回復した。5月6日の昼は平和のうちに過ぎた。そのため、私は、少数のパトロール隊と騎兵斥候隊だけを残して、部隊の残り半分をも撤収することが可能だと判断した。市の様々な場所において衝突が起こるのを予防するために、さらに数十人を残しておいた。彼らはグループ単位で集められていた。5月7日、昼の2時頃、ノーヴィイ・バザール近くのトルゴヴァヤ通りに、主に平民からなる群衆が、数人の下層民が起こした騒ぎに惹きつけられて集まった。これらの下層民は、近所の飲み屋の窓ガラスを割り、商売道具の一部を壊したのだった。群衆は、バザールに置いてあった大型木箱のいくつかをひっくり返した。その時、歩兵半中隊が到着し、群衆を追い散らし、12人の首謀者を逮捕した。同時に、全般的警戒に入るよう部隊に合図が送られた。このような警戒は、今回の事件だけによって出されたわけではなく、いくつかの工業施設に対する略奪が始まったという不確かな情報があったからでもあった。これらの情報は確認されなかったもので、警報に従って出動した部隊は、すぐに兵舎に戻った。同じ日の夕方7時頃に、群衆は、ラズモフスカヤ通りの商店を襲撃し、住居の窓ガラスを叩き落としたが、コサックの援助により彼らを解散させ、さらに7人を逮捕した。5月7日夕方頃には、全域において平和が回復した。

5月3日から7日までに、騒乱に加わった咎により逮捕された人の総数は500人程に上った。そのうち、ユダヤ人は150人程であった。彼らはすべて解の中にも収容され、昨日5月7日から、予備リストによれば、そのために任命された職員によって、逮捕者の組分けが始まった。この組分けは、騒乱にどの程度加わったかに関する報告に基づいて行われた。この作業は、私の承認に基づく特別な指示によって進められた。

ユダヤ人及び一部キリスト教徒の住民に対して加えられた損害を明らかにすることは、現時点では困難である。しかも、バザールに店を構えていた小商人の多くは、予め商品の大部分を隠していたから、損失の規模を明らかにすることはなおさら困難になっているのである。商品や財産の略奪の件数はきわめて少なかった。もっと大きな苦しみは蚤の市が経験した。市にあった994の小屋と163の大型木箱のうち、170の小屋と77の大型木箱が破壊された。町全体では、40軒の小商店と商店、50軒ほどの居酒屋をはじめ、245軒の家の窓ガラスが割られ、何軒かでは生活用品が破壊された。もっと大きな騒乱が、リシェリエフスカヤ通りとポチュトヴァヤ通りの角で発生し、時計職人や旋盤工

や靴屋の店から商品の一部が盗まれた。軍隊に対する公然の抵抗はなかった。衝突は、逮捕者を奪還しようとしただけで終わった。病院の報告によれば、死亡事故はなく、喧嘩の最中にけがをした人はいたが、きわめて少ない数で、男7人と女1人しかいなかった。そのうち、4人がユダヤ人だった。下級警官の中で、石や棒によって傷を受けた人が7人いた。ミンスク歩兵第54連隊の兵卒アフアナシイ・ショスタコフは、暴徒を追跡した際に転んで尺骨を折った。9日土曜日の聖ニコライの日と、10日日曜日に、再び騒乱が発生すると噂が広まっているので、前もって警戒のためにすべての対策が講じられた。居酒屋は閉じられ、パトロールが強化され、さらに、必要な場合、合図に合わせて、部隊がすぐに指定の地域に急行できる態勢を整えた。さらに、機会があり、監視の目がちょっとでも及ばなければすぐにでも暴徒の仲間に入る可能性のある、通りでぶらぶらしている群衆の数をできるだけ少なくするために、私は、来るべき祝日を視野に入れ、5月7日の夜から8日にかけて、安宿に泊まっている人を調べることが得策だと考え、パスポートや身分証明書がない人物を一時的に、人物を特定するまでの間拘束することを命じた。もし市の居住者でないことが判明した場合には、故郷や本籍地に帰すことにした。昨晚、書類を提示できない850人ほどの者が拘束された。まだ完全ではない情報に基づいてできるだけ多くの裁判が行われ、250人ほどの非市民に判決が下った。オデッサで起こった騒乱の性格は、基本的に、商業のすべての分野を独占していたユダヤ人に対する、以前にも見られた（とくに1871年）伝統的な悪感情（この悪感情は似たような暴動として現れ、もっと激しい性格すら備えていた）を含んでいる。しかし、今回の諸事件に明らかに政治的に信用の置けない人物が参加しているという事実は、「煽動者たちが、このようなケースに犯人に不可避的に下る処罰に対して民衆が不満を抱いていることを見てとって、自分の目的を遂行するために事態を利用した」と考えるのに十分な根拠を与えているのである。逮捕者に関する詳しい情報は今後引き続いて閣下にご報告いたします。侍従武官長ドンドウコフ・コルサコフ公。(Ll. d. 162-169)。

〈注〉1：Libausche Zeitung紙（1881年5月23日、第107号11）に掲載された記事全体が添付されている。

編集者

第137号

法務大臣。N・P・インガチエフ伯爵閣下へ。ニコライ・パヴロヴィッチ様。

閣下の本年5月12日付の手紙第2909号に対して、閣下に以下報告いたします。私は、ハリコフ、キエフ、オ



デッサ最高裁の検事たちに、皇帝陛下閣下の本年5月12日付の手紙第2909号に対して、閣下に以下報告いたします。少将クタイソフ伯爵が皇帝陛下から賜った任務を遂行する際に、皇帝陛下侍従武官長が彼に協力してくれるよう、私は、ハリコフ、キエフ、オデッサ最高裁の検事たちに依頼した。また、サンクトペテルブルク管区裁判所検事補七等文官ポストフスキーを新たにクタイソフ伯爵の配下に置いた旨ポストフスキー本人に通知した。敬具。ナボコフ。第7522号。1881年5月14日。(L. d. 173)。

第138号

内務省。ベッサラプスキー県知事。官房扱い。第1課。1881年5月9日第2300号。キシニョフ市。内務大臣様へ。

閣下に以下報告いたします。オルゲエフスキー郡警察署長より、オルゲエフ市において、「ユダヤ人とキリスト教徒との間に起ころうとしている衝突に対してユダヤ人が備えをしている」と警告する手紙が密かに投げ込まれているのが発見されたとの報告あり。これに基づき、私は、警察署長に、公共の安寧と平静を乱す騒乱を予防するために、オルゲエフ市の居酒屋の店主たちに対して、夜9時以降は飲み物の販売を禁止できるよう権限を与えた。(L. d. 177)。

第139号

内務省。エカチェリノスラフ県知事。官房扱い。第3課。1881年5月10日。第2049号。エカチェリノスラフ。

内務大臣殿へ。

私の5月8日付電報に追加して、閣下に下記報告いたします。マリウポリスキー警察署長より今し方受け取った報告によれば、5月7日にアレクサンドロフスキー郡境に住む農民が、ユダヤ人居住地の住民を襲撃した。これらの農民は、この郡のユダヤ人居住地・トゥルドリュボフカとネチャエフカ・で略奪を働いた後に、マリウポリスキー郡の居住地グラフスカヤとストラコヴォドナヤに向かった。前者の住民は略奪されたが、後者の住民は略奪者を撃退した。5月7日と8日、略奪者の中から、21人が略奪品の一部とともに逮捕された。現場にいた警察署長と郡警察署長がとった処置により騒乱は収まったが、騒乱の再発を防ぐため、私は、今しがた昨日アレクサンドロフスクに行った副知事に電報を打ち、彼の指揮下にある派遣軍とともに騒乱地域に急行するよう指示を出した。これは、副知事が軍

を伴って最も危険な興奮状態にあるアレクサンドロフスク郡を通過することになるため、それだけますます必要不可欠な対策である。個人的に受け取った情報によれば、暴力行為は他の民族に対しても脅威となっているという。私は、ヘルソンスコ・ベッサラプスキー国家資産局から、「略奪を受けた住民に対する金銭的援助について、国家資産大臣に申請した。局長自身が居住地を訪れる予定」との電報を受け取った。私は、エカチェリノスラフにおいて、秩序維持のためにあらゆる手段を講じた。その結果、現在まで騒乱は起きていない。本日、ロストフ経由でマリウポリスキー郡に向かう。これらの地域を自分で訪問する必要があると考えるからである。県知事ドゥルノヴォ。(Ll. d. 187-188)。

第140号

内務省。Podwoloczysk から1881年5月15日。第797号。

Folge Freilassung eingezogener Raubanstifter sind neue Excesse mit grauenhaften Drohungen zu furchten; das zurmeiden ersuchen wir am Bhhnhof wohnenden Gendarmen Major von Ogljo unbedingt von hier zu entfernen damit im begrieft gerichtliche Untersuchung bezuglich hiesige Raubaufalle deutlich ius Klarekommt; zodann werden auch mehrere geheime Gegenstande entdeckt. Damit Depesche night veruntreut selbe in Oesterreigh aufgegeben.

Woloczyskaer Judische Gemeinde Fogelbaum.

ポドヴォロチスクスに届いた1881年5月15日付電報の翻訳。

略奪の首謀者たちを解放した結果、新たな襲撃の恐れが生じた。それを避けるために、駆で生活している憲兵少佐オグリオをここから排除するよう願う。ここでの襲撃について審理する際に、真実が明らかにされ、まだ光の当たっていない行為が明るみに出るためである。電報はたしかに届いたので、オーストラリアで渡される。ヴォロチスカヤのユダヤ人共同体。フォゲイバウム。(L. d. 189)。電報に「フォローなし [ほったらかし]」との表書きあり。

第141号 財務省。モスクワ商業取引委員会。

1881年5月14日。第176号。内務大臣閣下へ。

ウクライナと商売をしている最も有力なモスクワの取引商人たちは、商業取引委員会に対して、南ロシアで



現在起こっている騒乱に関して懸念を表明し、来るウクライナの見本市（ロムヌイ市（ポルタフスカヤ県）のヴォズネセンスカヤ、トロイツカヤ（ハリコフ）、イリンスカヤ（ポルタヴァ））においてこれらの騒乱が再発しないよう対策を講じて欲しいと述べた。騒乱が発生すると、商売や産業全般において最も不幸な結果を与える可能性が高く、それらを倒産に至らしめることは必至であった。そのため、彼らは、商業取引委員会に対して、「上記の地域において安全が完全に確保されるよう万全の措置を講ずるよう政府に掛け合っただけで欲しい」と述べたのである。現在、一般に商人たちは、来るウクライナの見本市が成功するかどうか不安に思っている。こういった状況を考慮し、また、これらの見本市が商売に対して持っている意義を顧みた結果、商業取引委員会は、上記に関して、閣下の御判断を仰がねばならないと考えている次第である。

代表（署名判読不能）。(L. d. 193)。

第142号 内務省。クルスキー県知事。官房扱い。1881年5月11日。第385号。クルスク市。秘。内務大臣殿へ。プチヴリスキー郡貴族長は、本年5月7日に私に個人的な短信を送ってきた。この短信は、彼が率いている郡の貴族たちの委任に関する報告である（本報告に写しを添付）。この短信の中で、貴族長は、プチヴリスキー郡の農民たちは興奮の絶頂にあり、郡に住むユダヤ人に対してだけではなく、地主貴族に対しても騒乱を起こすことが予想されると述べ、安全確保のため、プチヴリスキー郡に部隊を差し向けるように要請している。プチヴリスキー郡を管轄する郡警察署長から私に届いた報告（本年5月1日付第853号）から分かることは下記のとおりである：1. コノトプ市において起こった反ユダヤ騒乱は、実際、コノトプ郡と隣接するプチヴリスキー郡の村々（ヴィヤゾヴィー、ゼムリャンカなど）の農民の心に有害な影響を与えた。これらの村の農民たちの幾人かはコノトプでのユダヤ人資産の略奪に参加していたからだ。2. 4月28日、ヴィヤゾヴィー村で、婦人の集団が、ユダヤ系退役軍人ザルマノヴィッチが経営する小間物店を略奪しようとしたが、地元の警察が介入したため、ごく初期の段階で騒乱は収まった。3. コノトプからの帰路の道々には、コノトプから戻ろうとしていた農民たちを監視するために衛兵が配置され、ユダヤ人から奪った物を提出させた。農民たちは、きわめて渋い顔をして品々を返した。中には当局に手向かう者もいた。4. この件で、地元の郡警察署長を助けるために、同じ郡の他の警察署長と2人の平巡査が派遣された。また、郡警察署長代理が現地向かった。……そして、後者は、郡における状況に関する私の質問に対して、次のような電報を送ってきた。すなわち、「コノトプの騒乱以降、プチ

ヴリスキー郡の農民の間で、地主の土地が強制没収されるとの噂が大きくなっている。ゼムリャンカ村の、地主チェレポフが所有するアルコール醸造工場において、農民たちがユダヤ人襲撃を共謀した。ボチェチュキ村では、デマを流す者の逮捕に際して平巡査が抵抗を受けた。地主たちは、農民の感情が危険な状態にあると考えている。警察が対策を講じているのだが、噂を抑えるには不十分である。それゆえ、すべての階層を鎮めるのには、軍隊の派遣が有効である。」上記を考慮し、また、以下の諸点に注意を払いつつ、私は、クルスク市に駐留している軍隊から一個中隊をプチヴリスキー郡に派遣し、地元の郡警察署長の指揮下に置いて下さるようクルスク県軍司令官に要請するものである。第一、プチヴリスキー郡の幾つかの村がコノトプ市と隣接している。コノトプ市ではすでに騒乱が発生しており、プチヴリスキー郡の幾人かの農民がこの市のユダヤ人の持ち物の略奪に参加したということは疑いもない事実である。第二に、最近南部で起こったすべての騒乱には、前向きな運動の要素が見られ、そのため、騒乱が、そのような騒乱が発生した地点と隣接する地域の境界線を越えて波及する恐れがあり、その可能性を未然につぶしておく必要があると考えられる。第三に、村における軍隊の駐留は、概して、郊外に住む人々に対して精神的に良い影響を与える。私は、派遣軍を分宿させる権限を郡警察署長代理に委ねた。それは、プチヴリスキー郡のくだんの村々の農民たちに道徳的な影響を与えるためであった。これは、現地の状態を考慮すれば、最も重要な対策であると思われる。ハリコフ臨時総督に、プチヴリスキーの貴族長の報告メモのオリジナルを提出するとともに、上記について報告したことを閣下に付言いたします。なお、本年5月9日にプチヴリスキー郡に派遣された34歩兵セフスキー連隊の2個中隊は、ハリコフ臨時総督の指揮下にあります。

知事代理、副知事……署名判読不能。(Ll. d. 196-198)

(2013年9月11日受理)